

「先人の足跡」への投稿について（ご案内）

教育問題

プロジェクト・チーム

偕行社教育問題PTは、昨年2月号から、「先人の足跡」シリーズを掲載して参りました。本年1月号で、このシリーズも11回目を迎えることができました。読者の皆様にご感謝申し上げます。

さて、今後とも、このシリーズの内容を充実するため、PTの各委員も大いに意欲を高めているところです。これまで、委員の中から、「本企画の趣旨に賛同され、是非投稿したいという方もおられるのではないか」との意見もたびたび出されており、今般、広く会員の方々からの投稿を募ることといたしました。

つきましては、昨年、「先人の足跡」の掲載について」として、シリーズ開始にあたって本企画の趣旨を述べたものを文末に再録いたします。これをご覧いただき、ふるってご投稿をお願いいたします。

ご投稿にあたり、以下の点を、あらかじめご了解いただきたいと思います。

① 「偕行」の読者の皆さんが、自分のお子さんやお孫さんに読み聞かせてあげられるようなものとしたいとの趣旨から、文章は、努めてわかりやすく、「です・ます調」を基本とするものと。

② 副題として掲げるべき道徳的な教訓を含んでいること

③ 取り上げる人物や事象は、原則として旧軍あるいは旧軍人にかかわる事項とするが、道徳的教訓を含んでいればそれにこだわらない。

④ 総字数は、5000字程度を基準とする。

⑤ 投稿原稿の取り扱いについて

投稿いただいた原稿は、教育問題PT委員のものと同等に取り扱い、PTの審議を経たのち、編集委員会で審議されて掲載される。

掲載の際、教育PT委員の記事と全く同様の取り扱いとし、個人名も掲載する。

この際、PT委員の原稿と同様、編集委員会等の審議結果により所要の修正等をご了解いただく場合がある。

また、掲載号等については、編集委員会により決定される。

⑥ ご投稿の手順について

メールに原稿を添付していただくことを原則とする。
やむを得ない場合は、記憶媒体でこ

郵送ください。（この場合、記憶媒体は、お返しできません）

宛先：教育問題PT事務局長 今野茂雄

メールアドレス：

notice_fourth_fourkon@yahoo.co.jp

なお、ご投稿いただいた方の中でご希望される方には、2カ月に一度のPT委員会にご参加いただく等も歓迎いたします。その場合は、その旨、投稿の際にメール等にお書き添えください。

「先人の足跡」の掲載について

（平成29年2月号より再録）

平成30年から31年にかけて、小中学校での道徳教育が正式科目として実施される予定です。わが国の道徳は、長い歴史の中ではぐくまれてきたものと思いますが、教育問題PTでは、わが国の道徳を形づくってこられた多くの先人の事蹟の中から、偕行社の特性上、旧軍人の事蹟を中心としてその遺徳を偲び、簡潔な物語を逐次掲載していきたいと思っております。

戦後、修身教育は廃止され、憲法とともに教育基本法も、戦後占領下でつくられました。戦前の反省に立って戦後の日本はすべてにわたって新しい出

発をしたというわけです。しかし、戦前のわが国について、真摯に事実と本質を踏まえた冷徹な反省がなされたとは言いがたく、多分に「戦前は悪かったから戦前に戻ってはならない」というような感情的な「反省」だけが繰り返されてきたように感じます。

第一次安倍内閣でようやく教育基本法が改正される等、「戦後体制」をもう一度見直そうという気運も生まれてきているように思います。私たちが、どこかに置いてきてしまったかもしれない「大切なもの」をもう一度考え、みる必要があるのではないのでしょうか。

新しい「道徳」における教育徳目は、よく考えられていると思います。その徳目に該当する先人の簡単な伝記は、道徳が実践陶冶を旨とするという本質を考えれば、道徳教育の中で大事な位置を占めると考えます。新しい道徳の教科書も、そのような具体的事例を踏まえて、教育のあらゆる機会を捉えてなされていくことと思います。

わが国の歴史と伝統に裏打ちされ、世界に立派に通用するわが国の道徳の完成に向け、私たち日本人一人一人がこれに参加する心構えが必要な時期に來ていると感じています。

教育PTでは、微力ではありますが、その一端を担いたいと思っており、先

に述べたように、旧軍人（陸海軍を問わず）の足跡について、道徳の徳目に関わる事例を物語にして逐次掲載してまいり、ゆくゆくは、取り上げる幅を広げていければと思っております。

戦後、失われたと思われる日本人の生き様が、東日本大震災等の急場に臨んで表面に現れ、内外の賞賛を受けたことは記憶に新しいことです。このことは長い歴史にはぐくまれた日本人の道徳は日々の生活や慣習を通して、どっこい脈々と生きていると私たちに確信させました。

これから連載される軍人の物語は、その任務の特性から、とりあげる道徳の徳目としてはある程度限定されることになると思いますが、反面、日本人の生き様が鮮烈に現れているものとなるでしょう。

『偕行』の読者の皆さんが、ご自分のお子さんやお孫さんに読み聞かせてあげられるようなものとしたいと考へ、記述にあたって、対象として中学校の生徒を想定して興味を持って読めるようなものにしようと思っております。